

憶しやすくしている。

出典となっている書は、「礼記、論語、孝経」が多く、特に「礼記」曲礼の記述は随所に盛り込まれ、父母や目上の人に対する態度については、「曲礼」そのままの引用が見られる。女子に対しての訓戒もあり、この部分は唐代の通俗的女訓書である『女論語』からの引用がほとんどである。先行する女訓書をほとんどそのまま利用したようである。

後半になると、教訓的諺や格言が主になる。「近朱者赤、近黒者黒」「人無遠慮、必有近憂」「瓜田不整履、李下不整冠」「孟母三思、為子折隣」など知っておきたい諺・格言や故事成語の類もならべ、礼儀教育のみならず、知識教育もかねた教科書なのである。よく耳にする言葉ならべてあるので、識字教育にも都合がよい。

「太公家教」のほかにも、教訓、格言集として、同じく「家教」の名を持つ「武王家教」「弁財家教」、一巻本の「王梵志詩」、「百行章」、「崔氏夫人訓女文」、「新集嚴父教」などがある。「新集嚴父教」は巷の学校で使われた非常に卑近で簡便な教訓書である。初学の教育ではとくに道德教育を兼ねることが大切であり、読み書きとともに、社会の一員としての常識を身につけることが重視されたのである。では、学生たちはどんな思いで勉強していたのであろう。

学生が書写の間に残した詩文がある。所謂「学郎詩」である。しつかり勉強して身を立てようと言うものの、自分の書写に誤りがあつたら直してくださいと頼むもの、酒も吞まずに励んでいると言うもの、他人の紙にいたずら書きをするもの、自分の文字は誰にも読めまいと誇るもの。敦煌の学生たちは時空をこえて、いきいきと私たちに語りかけてくれるのである。

第四五七回 五月二三日（火）

写本から見た敦煌の言語生活

京都大学教授 高田 時雄

写本のみからかつて敦煌で展開された言語生活の隅々に至るまでを説明しようとするなら、それは不可能事と言うしかないが、その一斑を窺うについては少しばかりの手がかりがありそうである。敦煌はもともと西域経営の前哨基地として、漢人によつて建設された町であり、その主たる住民も漢人であった。しかしシルクロード上に占めるその位置から、他の周辺諸民族がしばしばここに往来し、さらには敦煌住民の構成部分ともなっていた。おそらく敦煌は

当初から多民族的な性格を備えていたと推測される。事実、藏経洞から発見された写本群には、漢文写本以外にも、チベット文、コータン文、トハラ文、ウイグル文など、多種の文字で書かれた多数の言語による写本が含まれているのである。漢文以外の言語による写本を詳しく見ていくと、多言語社会としての敦煌といっても、その展開に歴史的経緯が色濃く反映していることが知られる。八世紀の七〇年代から九世紀の半ばにかけて、敦煌が吐蕃の軍事支配下に置かれたという歴史事実は、とりわけ敦煌の言語社会に甚大な影響を及ぼした。七〇年余に及ぶ吐蕃の支配は、必然的に敦煌住民にチベット語の習得を促し、チベット語を用いる漢人の社会集団を生み出したようである。その存在は敦煌がすでに吐蕃の軔から脱した九世紀後半から一〇世紀に至っても確認されるのである。

彼らは漢語をチベット文字で書き記した。漢文写本から窺い知ることの出来ない当時の敦煌における漢語の実相が、こういった音写材料から判明する。敦煌では、唐の盛時から吐蕃期、さらに張氏帰義軍時期に至るまで、なお長安の言語がつよい規範として意識されていた。しかし一〇世紀の曹氏時期、敦煌を中心とする地域が実質的な独立国家となるに及んで、寺院における諷經の音も河西音を用いるようになるなど、土地の方言（河西方言）の台頭が目覚まし

くなってくる。このような敦煌における言語規範の推移は、相当数に上るいわゆる藏漢資料によって確認されるのみならず、一〇世紀のコータン文字転写資料によっても裏付けが可能である。

また人々は読書のために、日常の口語とは異なる字音を学習する必要があった。これも一〇世紀になると、河西独自の字音が形成されていたため、それが寺院附設の学校で教授された。最初の教材としては千字文や開蒙要訓などの童蒙書が用いられたが、その読音にも河西音が用いられたのである。敦煌写本には難字だけを拾い集めて、河西音に基づく直音音注を付けたものが数多く見られるが、恐らくは生徒たちのノートであろう。また珍しいものとしては、書物中の疑問となる字音を尋ねる手紙も残っている。この時期、切韻や玉篇の利用は制限されており、反切という音注形式も往々その利用の妨げとなった。また他に字音を知るための適当な参考書も完備していなかったため、字音は主として口伝により教授されたと思われる。

文語の強い伝統のなかで、唐代以降、口語が次第に文字化されるようになる。語録をはじめとする禪文獻や、変文や講經文などの説唱文学がその最たるものであるが、ともに敦煌写本中に保存されていて、これらが口語文の成立の経緯、乃至は口語と文語の相互関係を探る糸口を与えてく

れる場合がある。たとえば「大乘三科」というテキストの現存数種を比較すると、口語と文語のあいだをかなりな程度に揺らいでいることが分かる。テキストがなお固定するに至らない時点で、用いるべき言語を口語にするか、あるいは文語を用いるかという決断を前に躊躇する姿をそこに見いだし得る。これは一個のテキストの成立過程を如実に追跡できる希有な例であるとともに、当時の言語使用の現場における口語と文語のはざまを窺う好例といえよう。反対に、文語はまた、決して口頭語として用いられなかったのではない。文書における範例に一定のかたちがあったのと同様に、格式張った場面ごとに官吏の用いる言葉は、きわめて固的な文語的表現が規定され、実行されていたと考えられる。その表現は各種書儀写本の中に散見している。